

博士學位論文要約

論文題目： 19世紀デンマークにおけるディアコニア思想
ーハラルド・スタインの場合ー

氏名： 森本 典子

要約：

題目 19世紀デンマークにおけるディアコニア思想
ーハラルド・スタインの場合ー

目的と章構成

本論文は、19世紀のデンマークにおいてディアコニッセ及びディアコニアの働きを、当時のデンマーク社会に周知させることに尽力したハラルド・スタイン(Harald Stein)のディアコニア思想に光を当てることを目的とする。

序章では、問題の所在、本論文の課題と研究方法を明確にする。

第1章では、ディアコニアという用語について、歴史上どのように使用されてきたかを概観した後、従来のディアコニア研究について短く紹介する。また、本論文におけるディアコニアという用語の概念を定める。

第2章では、19世紀のデンマークの政治的、社会的状況とキリスト教会の状況を概観する。

第3章では、ハラルド・スタインの生涯を紹介する。

第4章では、スタインのディアコニア1として、ホルメン教会で牧師補として働いている間に著した『女性キリスト者の歴史に関する小冊子ーディアコニッセの事柄の推進のためにー』、デンマーク・ディアコニッセ事業団の牧師として勤めた間に年報として執筆した報告書、地方における講演会を活字に起こした『福音教会においてディアコニッセとなるとはいかなることか』そしてヴィボー事件の際に記した書簡や手記などを基に、スタインのディアコニア思想を考察する。

第5章では、スタインの8度の講演をまとめた『内国伝道協会の目的とは 信仰と愛における働きについての8度の講演』、伝道センターベテスタと聖マタイ教会教区援助会の落成式における講演や説教を基にスタインのディアコニア思想を考察する。

終章においては、スタインが影響を受けたと考えられるキリスト教思想や社会主義からスタインのディアコニアがどのようなものであったのかについて再度の考察を試みる。

各章要約

・序章 問題の所在及び研究の課題と方法

産業革命が押し寄せた 19 世紀のデンマーク社会では、時を問わずして絶対王制から立憲君主制へと社会制度が変更され、新憲法が施行された。これにより、従来国教であったキリスト教が廃止され、宗教の自由が保障された。多くの農業従事者はより豊かな生活を求めて都会へと移住したが、十分な生活の糧を得ることができず、住環境も劣悪だった。しかし、地方からの移住者には従来のような地域におけるネットワークはなく、教会が拠り所ともならなかった。社会主義がデンマークにもたらされたのもこの様な時期であった。

ハラルド・スタインは、このような混乱を極めたデンマーク社会において、キリスト教の伝統であるディアコニアの働きにより教会の活性化を試みた人物である。彼が提唱したディアコニアの働きの多くは、後に国民教会はもとよりデンマーク社会でも実現された。しかし、当時のデンマーク社会においてスタインの思想や試みは十分に理解されることがなかったため、デンマークでディアコニアを語る際に彼の名前が登場することは稀である。それ故、デンマークにおいてもスタインに関する十分な研究がなされているとは言い難い。

本論文においては、スタインの著作や説教集、講演集をもとに彼のディアコニア思想とその背景を紹介し、彼が目指したものを考察する。

・第 1 章 ディアコニアという単語とディアコニア研究について

ディアコニアという単語は、新約聖書の中に登場するギリシャ語単語であるが、歴史の変遷の中で聖書に登場する単語とは別の意味が与えられ、理解されるようになった。

特に現代においては、ディアコニアという単語を定義しようという試みがある一方で、ディアコニアに関する研究の歴史は浅く、また、言葉に対する統一概念もないという見解も存在する。

本論が扱う 19 世紀のデンマークにおいては、ディアコニアという単語そのものの使用頻度が低く、スタインも現在であればディアコニアという単語を使うであろうという場合に、*tjeneste*（勤め、奉仕）や *kærligheds gerning*（愛の業、愛の行い）という言葉を用いている。そのため、本論文では、スタインが *tjeneste* や *kærligheds gerning*、また、これに類似した言葉を使いキリスト教における隣人愛の働きを表現する際、それらがディアコニアという言葉の意味すると考える。

既述の通りディアコニアに関する研究はまだ歴史が浅く、歴史研究においては実践例を紹介するものが多い。また、研究者それぞれの関心によってディアコニア研究へのアプローチの方法が異なる。すなわち、新約聖書におけるディアコニアとそれに関連する単語の研究、実践神学的研究、組織神学的研究などである。

・第 2 章 19 世紀のデンマークとキリスト教

とりわけ 19 世紀前半のデンマークは、産業革命の波が押し寄せ、ナポレオン戦争の敗戦により混乱を極めた。そのような中、国民の自由を求める機運が高まり、1848 年には絶対王制が崩壊し、新憲法が制定された。更に、社会主義がもたらされ、デンマークには新しい価値観が次々に登場したが、キリスト教会はその時代の変化に充分に対応することが

できなかつた。

特に、地方の農業従事者がよりよい生活を求めて移住してきた首都コペンハーゲンでは、地域とのつながりを持たない生活困窮者が増加した。このような状況にあつて、キリスト教会は地域福祉の担い手としての役割も求められていた。しかし、生活困窮者が多く住む地域では人口に対し教会の数は充分ではなく、支援者も少なかつた。一方、社会主義者たちは労働組合を組織し、支持を集めた。当時、デンマーク国民教会シェラン島監督であつたマーテンセンは、危険思想とみなされることの多い社会主義にキリスト教の立場から注目し、『社会主義とキリスト教』を著した。彼は、社会主義者たちが取り組む貧困問題や労働問題はキリスト教会の課題でもあるとし、キリスト教的、倫理的な社会主義を提唱した。

・第3章 ハラルド・スタインの生涯

スタインの生涯に関する文献は乏しく、彼自身が自伝として書き残したものを彼の甥が本としてまとめたもの、そしてデンマーク・ディアコニッセ事業団(Den danske Diakonissestiftelse 以下、デンマークの慣習により DST と略)の記念誌にまとめられたものが残っているだけである。限られた文献、それも、その多くがスタイン自身によって残されたものであり客観性を欠く恐れもあるが、スタインの生涯を知ることは、当時のデンマーク社会を知ると同様に彼の思想背景を理解する上で重要である。

ハラルド・スタインが生まれた1840年は、社会が大きな変化を遂げようとしている時代であつた。彼は比較的裕福な家庭に育ち、多感な青年期には学校や父の職場の人々、そして外国旅行などにより様々な刺激を受けた。そして、これらの経験が彼を神学の道へと導いた。大学卒業後は、悩んだ末に牧師の道を進む決心をした。彼の牧師としての働きは常に順調であつたとは言い難いが、DSTの牧師として、コペンハーゲン内国伝道教会協会(以下、コペンハーゲン伝道協会と略)の理事として、そして、生活困窮者の多く住む地域に献堂された聖マタイ教会の主任牧師としてディアコニッセとディアコニアの働きを周知させることに尽力した。しかし、聖マタイ教会での働きに体力的、精神的な限界を感じていたところにフン島監督の招聘を受け、その召しに応じたのであつた。

スタイン自身が、その手記において自らの生涯を総括した記録はない。しかし、彼に直接接触した人々が、彼の人となりを書き記したものからは、不器用ながらも思いやりのある人となりが窺えるのである。

・第4章 ハラルド・スタインのディアコニア 1

ここでは、スタインがホルメン教会の牧師補であつた時代から DST の牧師として働いていた時代までの著作、説教、講演からスタインのディアコニア思想を紹介し、考察を加える。

スタインがホルメン教会の牧師補であつた1872年に著した『女性キリスト者の歴史に関する小冊子—ディアコニッセの事柄の推進のために—』(Nogle Blade af den kriste Kvindes Historie - Et bidrag til Diakonissesagens Fremme -、以下、『小冊子』と略)は、主に初代教会からのディアコニッセの歴史を記したものであるが、スタインのディアコニア思想の基礎となるものと言える。スタインは、この『小冊子』において、ディアコニッセの

働きは初代教会からの伝統であること、女性の立場の向上につながることを主張した。また、ディアコニッセの働きに批判的な見解への反論を試みた。さらに、教会共同体が社会的弱者のための働きをすることはキリスト教会の伝統の一つであるが、ディアコニッセはその働きに大きな貢献ができると主張した。

1872年から1874年までのDSTの年報においてスタインは、ディアコニッセの働きの重要性を繰り返し記している。彼は、ディアコニッセの働きが国民教会の中で認知されることを目指したのである。そのため、国外においてディアコニッセの働きは活発であり、キリスト教会から認められていること、女性にも教会で働く能力が十分にあること、そして、その能力を生かしたディアコニッセの働きによってキリスト教会が再び活性化され、評価されるようになる可能性があることなどを主張した。

1875年に開催した講演会の記録である『福音教会においてディアコニッセとなることはいかなることか』(hvad vil det sige at være Diakonisse i den evangeliske kirke)においてスタインは、キリスト教史におけるディアコニッセの位置づけについて、奉仕者となることはいかなることか、ディアコニッセとなるということはいかなることかなどを述べ、ここでもキリスト教会におけるディアコニッセの働きの正当性を主張した。

しかし、この講演後、スタインがDSTの牧師を辞任する引き金となったヴィボー事件が起こった。ディアコニッセが男性患者の手術に立ち会い身体的看護をすることの是非を問うことになったヴィボー事件においては「召命が業を聖くする」というスタインの見解とディアコニッセの「女性の品位に関わる」という見解とが対立した。この事件においてスタインとディアコニッセたちとの見解は一致を見ることがなく、スタインがDSTを辞職するという結果をもたらした。

・第5章 スタインのディアコニア 2

本章では先ず、み言葉による伝道のみを活動方針とするデンマーク内国伝道教会協会(以下、内国伝道協会)と首都の状況に見合った伝道方針を打ち出したコペンハーゲン伝道協会の歴史について概観する。スタインが理事となったコペンハーゲン伝道協会は、人口が急速に増加する一方、教会から離れる人々も増加する首都コペンハーゲンにおいて、み言葉を宣べ伝えると同時に教会から離れてしまった人々への身体的支援も実践する、み言葉と業による伝道を活動方針に据えた。しかし、コペンハーゲン伝道協会の母体である内国伝道協会の方針と異なったことにより軋轢が生じ、スタインは理事の座を退くことになった。

1875年、コペンハーゲン伝道協会の理事になったスタインは、コペンハーゲン伝道協会の活動への理解を得るために、市民向けに8度の連続講演会を開催した。そして、その連続講演会の内容は『内国伝道協会の目的とは 信仰と愛における働きについての8度の講演』(hvad vil den indre Mission? Otte Fordrag om Tro, virksom i Kærlighed、以下、『講演集』と略)、という講演集として出版された。これは後に、スタインのディアコニアプログラムとも呼ばれるようになる。ここでスタインは、ディアコニアを子供や青年男女のための「助け守る愛」、犯罪者や罪深いとされる人々のための「解放する愛」、病人や障害者、生活困窮者のための「痛みを和らげる愛」の三分野に分類し、そこにおいてディアコニア

が身体的救済のみならず霊的救済を目指すもの、即ち、全人的なものであることを示した。この『講演集』は『小冊子』同様、スタインのディアコニア思想の中核をなすものと考えられる。またスタインは、『講演集』で社会主義についても触れている。彼は、当時の社会主義者が主張した、神を否定するような悪魔の社会主義ではなく、キリスト教の教えを中心に据えた社会主義が勝利するように活動するべきだと主張した。しかし、スタインは富の再分配や労働者の地位向上などに触れてはおらず、どのような意味において社会主義という言葉を使用しているのかを明確に記してはいない。

スタインがコペンハーゲン伝道協会の理事長だった 1882 年には、伝道センターベテスタダが建設された。その落成式においてスタインが語ったのは、神から離れてしまった人々を再び神のもとへと連れ戻すことがベテスタダにおける働きだということだった。そのために、人々に必要な配慮もすべきであるとスタインは考えた。

1880 年、ヴィボー事件により DST を辞職したスタインは、その 5 か月後に聖マタイ教会の牧師となった。貧困層の多く住む教区で牧師として働いたスタインは、教会共同体が教区民を援助するための拠点が必要だと考え、教会共同体援助会の家の建設に取り組んだ。その落成式でスタインは、魂への配慮と身体への配慮の両方に取り組むことが教会共同体によるディアコニアの働きであると述べた。

・終章 スタインのディアコニア

スタインは、17 世紀から 18 世紀にかけての敬虔主義、それに背景を持つ信仰覚醒運動や内国伝道運動から刺激を受けた。彼は、しばしば「義認と聖化」に言及した。しかし、彼の「義認と聖化」の理解は、当時、デンマーク国民教会の中で影響力を持っていた内国伝道協会の理解とは内容を異にした。スタインにとっては、イエスの十字架が罪の許しと聖化の出発点であり、社会的弱者とともにあることで「義認と聖化」が可能となるのであった。神と個の関係を重視する敬虔主義と教会共同体を重視するスタインとでは基本的な思想が異なるとも言えるのである。

スタインは社会主義からも刺激を受けていたとすることができる。スタイン自身が語っているのではないが、彼が、DST 在職中に交流を持ったマーテンセンのキリスト教的、倫理的な社会主義に関して知見を得ていたことは想像に難くない。しかし、スタインが語る社会主義には、富の再分配や社会の底上げなどの思想は登場しない。彼は、社会的格差を肯定することはなかったが、否定もしなかったのである。また、女性の地位の向上については語ったが、それはあくまでも男性の補助役としてであり、社会主義が唱えた男女同権には否定的であった。彼は、当時の社会状況を変革しようとしていたのではなかったのである。

スタインは、先ず、ディアコニッセの働きに関心を持った、しかし、彼の立場の変遷とともにその関心もディアコニアの働きそのものへと移っていく。スタインにとってディアコニアとは、社会的弱者と呼ばれる人々のために実践される全人的、即ち身体的、霊的支援であり、人々を義認と聖化へと導くものであった。そして、この様なディアコニアは、教会共同体に活力を与えるものだとスタインは確信していた。彼は、教会共同体においてディアコニアの働きを実践することにより、教会を活性化させることを目指したとのであ

る。

まとめ

スタインのディアコニア思想は、それまでのキリスト教思想のみならず、変化の中にある時代にも影響を受けながら形成された。彼は、キリスト教会は地域の中にあつて、地域の人々に霊的、身体的救済をもたらさなければならないと考えた。そして、それにより教会は再び活力を取り戻すことができると確信していたのである。

主な引用文献・参考文献

Stein, Harald. *Nogle Blade af den kristne Kvindes Historie. Et Bidrag til Diakonissesagens Fremme*, Kjoebenhavn, G.H. Delbanco., 1872.

――. *Nogle Meddelelser om Diakonissesagen i Sverig og Holland samt Beretning om den fjerde Generalkonferens i Kaiserswerth den 18de-19de Stptbr. 1872. Niende og tiende Beretning om den danske Diakonisse-Stiftelses Virksomhed, omfattende Tidsrummet 26de Maj-31te Decbr. 1872.*, Kjøbenhavn, I.H.Schulss, 1873.

――. *Aaresfesten den 23de Maj 1873. Ellevte Beretning om den danske Diakonisse-Stiftelses Virksomhed, omfattende Tidsrummet 1ste Januar-31te December 1873.* Kjøbenhavn, I.H.Schulss, 1874.

――. *Aarsfesten den 8de Juni 1874. Tolvte Beretning om den danske Diakonisse-Stiftelses Virksomhed, omfattende Tidsrummet 1ste Januar-31te December 1874,* Kjøbenhavn, I.H.Schulss, 1875.

――. *hvad vil den indre Mission ? Otte Foredrag om Tro, virksom I Kjærlighed.* Kjøbenhavn, Indre Missions Boghandel, 1876.

――. *Hvad vil det sige at være Diakonisse i den evangeliske kirke?*, Kjøbenhavn, 1877.

――. *Minder fra Emmauskirken. Sexten Prædikener.* Kjøbenhavn, GAD, 1879.

――. *En Fremstilling af de Forhold, der bevirkede min Afsked fra Diakonissestiftelsen,* 1880.

――. *Den Utro Husholder. Praediken til Niende Soendag efter Trinitatis.* Kjoebenhavn, Graebes Bogtrykkeri, 1882.

――. *Tale ved Indvielsen af Missionshuset Bethesda Den 26 september 1882,* Kjoebenhavn, Indre Missions Boghandel, 1882.

――. *Ved Indvielsen Sct. Matteæus Sogns Plejeforenings Bygning d.31. August 1886,* 1886.

Dalhof, N. *Den danske Diakonissestiftelse 1863-1913.* KØBENHAVN, CENTRALTRYKKERIET, 1913.

Dietz, Susanne Malchau, *Køn, Kald & Kompetencer Diakonissestiftelsens kvindefælleskab og omsorgsuddannelser 1863-1995.* København, Nyt Nordisk Forlag Arnold Busck A/S.

Koch, L.J. *Tro og Tjeneste Den Danske Diakonissestiftelse 1893-1891.* København, O.Lohse, 1938.

- Hauge, Svend.** *I Troskab Mod Kaledt. Den Danske Diakonissestiftelse 1863-1963.*
København, J.Frimodts Forlag, 1963.
- Kjær, Lise Lotte.** *Harald Stein,* 'Kirkehistoriske Samling 1985.
- Lindhart, O.G. og Swane, Jørgen.** *To Højkrigemænd Brevbexling mellm bisperne H.Stein og J. Swane,* Århus, Universitetforlaget i Aarhus, 1958.
- Lindhart,O.G.** *Harald Stein,* 'Dansk Biografisk Leksikon', Gyldendal, 1983.
- Madsen, W. Westergård** " At være kirke på broerne ". *SCT. MATTHÆUS KIRKE 1880—1980.* Red. Sct. Matthæus sogns Menighedsråd, Skive, 1995.
- Stein, Johannes.** *Harald Stein Biskop over Fyns Stift *9. Marts 1840— †5. Januar 1900.*
København, G.E.C,Gads Forlag, 1933.
- 浅野仁、牧野正憲、平林孝裕編 『デンマークの歴史・文化・社会』創元社、2006年。
橋本淳編 『デンマークの歴史』創元社、1999年。
百瀬宏、熊野總、村井誠人編『北欧史』山川出版社、1998年。
- Bjørn, Claus.** *Danmarkshistorie- Bind 11 Det Folkelige Gennembrud og Dets Mænd 1800-1850.* København, Gyldendals Bogklubber, 1990.
- Hvidt, Kristian.** *Danmarkshistorie- Bind 11 Det Folkelige Gennembrud og Dets Mænd 1850-1900.* København, Gyldendals Bogklubber, 1993.
- Koch, Hal.** *Danmarks Kirke gennem tiderne,* Copenhagen, De Unges Forlag, 1939.
- Lausten, Martin Schwarz,** *Danmarks Kirkehistorie,* København, Gyldendal, 2004.
- Collins, John N.** *Diakonia Re-interpreting the Ancient Sources.* New York,
Oxford University Press, 1990.
- Foss, Øyvind.** *Kirkens diakoni i bibelteologisk, historisk og etisk belysning.* Århus, Aarhus
Universitetforlag, 1992.
- Nielsen, Helge Kjær,** *Han elskede os først Om bibelske begrundelse for diakoni.*
Århus, Aarhus Universitetsforlag, 1994.